



第三回 看護師さんに感謝をこめて

生誕二〇〇年「ナイチンゲール」物語

講談師 一龍斎貞花

日本赤十字社は、西南戦争の負傷者を

救護するため明治十年（一八七七）五月

一日に設立された博愛社が前身で、官軍

と薩摩軍双方の負傷者を分けへだてなく

看護、創始者は幕末の佐賀藩士で、明治

維新後大蔵卿、元老院議長を勤めた佐野

常民。

従軍看護婦は、日清戦争で国内の陸海

軍病院に配属され、日中戦争、太平洋戦

争の拡大と共に大勢が召集され、陸海軍

大臣の管理下に置かれ、何度も召集され

延べ約三万五千人、殉死者一二四人。

一般兵と同様、赤紙に印刷された「戦時

召集状」が届くと、家庭の事情にかかわ

らず出征しなければいけなかった。

現在は、災害や、外国の災害、時には

戦闘での負傷者救護に向う看護師さんも

あり、以前私のチャリティー寄席に出演

して頂き苛酷な状況を話して頂きまし

た。

一八五三年、ロシアがトルコに戦いを

挑み、イギリスは翌年トルコへ援軍を

送ったが、戦いは激しさを増しトルコの

北側、クリミア半島で激突。野戦病院で

の救護を依頼されたフローレンス・ナイ

チンゲールは、38人の看護婦を率いて野

戦病院へ。

包帯、ガーゼもシーツの替えも無い。

医者は診察し薬を与えるだけであとは

放ったらかし。フローレンスたちがきび

きび仕事をして、病人たちから感謝され

ているのが面白くなく、なにかと嫌がら

せをする。

フローレンスは、自らペンを取り、大

臣に病院の様子をくわしく報告、新聞社

にも実情を訴え、必要な物を送ってくれ

よう依頼。

次々と荷物が届けられたが、医師達は
すぐに手続きせず、病人のためという
看護婦の願いも聞いてくれない。

「次々と荷物が届いているのに、どうし
てすぐに手続きをしてくれないんでしょ
う」

「そうね、でも患者さん達のために出来
るだけのことをして上げましょう。食事
も皆同じように硬い肉のかたまりを出し
ているだけ。これではいけないわ、病状
によって温いスープを出してあげましょ
う」

「婦長さん、今日も裏門から亡くなった
人が大勢運び出されていきます」

「病院は、随分清潔になったのにどうし
て亡くなる人の数が減らないんでしょ
う」

「どうしたらいいのかしらねえ・・・」

そうだわ私達は忙しく働くことに気を取
られ、患者さんの名前さえ十分に覚えて
いない。看護婦は患者さんと親しくお
しゃべりをしてはいけないという規則に
とられすぎて、大事なことに気がつか
なかったのよ。まず患者さんの心を大切
にしなればいけないんだわ」

この日から、フローレンスは夜の見廻
りを始めた。

ある時、年取った兵が大怪我をして運
ばれてきた。軍医は、

「こりゃ年寄りだから治る見込みはな
い。後回しだ」

フローレンスは、息も絶え絶えな高齢
の兵士を見ているうちに、この人の奥さ
んや子どものことが思われてなりませ
ん。ぐつと手を握りながら、



「貴方は立派に戦って下さいました。奥さんや子どもさんが、立派な働きをしたお父さんの帰りを待っていますよ。怪我に負けてはいけません、頑張ってください」

力を無くしていた兵は、この励ましに元気を取り戻し、手当てをするやどんどんよくなっていきました。

正にカウンセラーです。病体を治すのは医師、病は気から、病気を治すのは看護師さんです。

戦場での手術は、麻酔薬もなくそのまま手術するので、軍医がメスを持って近づくと

「死んだほうが、ましだ」

と、手こずらせる者もいます。

「私を、お母さんと思っしつかりこの手を握っていらっしやい」

フロレンスが、手術台のそばで歯をくいしばり苦しみを一緒にこらえていることを知ると、痛い手術もジツと我慢するのです。

邪魔をしたり、嫌がらせをした軍医達は、看護婦たちの暖い看護ぶりに感じ、自分達のこれ迄のことを恥じてお互い助け合うようになり、こうして汚かった病院も暫くの間に、見違えるほどきれいで

気持ちのよい病院に変わっていきました。

回復に向う兵士のため、図書室やカフェを開き、家族に手紙やお金を送ることをサポート。回復には気を持ち方がいかに大切であるかということです。

ランプの天使

看護婦達は、フロレンスを「婦長さん」と呼び、一緒にいる看護婦が、婦長さんの1時間という文を書いたことがあり、一日24時間のうち23時間働き通しで、自分の時間は1時間くらいしかないとわれる程でした。

「婦長さん、お休み下さい。私達が代わって夜の見廻りをしますから」

「大丈夫よ、貴女達も疲れているのだから、私のことは心配しないで早くお休みなさい」

看護婦達を休ませ、一日のまとめが終るといつも夜中になってしまう。それから病室を見廻って歩く。

一つ一つのベッドに話しかけるように照らすランプの灯りを見、静かな足音を聞くと安心して眠りにつく。寝られない

でいる人には、

「少しお話ししましょうか、聖書を読んで上げましょうか」

「アラ貴方、今日も食べなかつたそうですね。ミルクを少し飲んでみませんか。サ私が飲ませて上げましょう」

若い兵は、スプーンでミルクを飲ませてもらいながら思わず、

「お母さん！」

「エエ、早く元気になってお母さんの処へ帰りましょうね」

「ナイチンゲールさんは偉い人だ。僕らを救ってくれたのは、あの人の優しい看護のお陰だ」

「あの人がいるだけで、僕はなんだか嬉しいんです」

フロレンスは、毎晩毎晩ランプを持って一人一人を慰め励まして廻り、ランプの天使とも呼ばれ、兵士達はフロレンスが廻ってくるのを楽しみに待つようになり、生きる張り合いを取り戻していき、フロレンス達がこの病院に来た時には、43%もの人達が死んでいったのが、わずか半年の間に2%に減るといった驚くべき成果を収めたのです。

看護婦さんの力って大きいですね。

日本でも現在看護専門学校に入学して基礎的な勉強をしてきた看護婦の卵たちが、戴帽式に臨みます。帽子、キャップをつけることによって初めて病院実習の参加が許可される晴れの日、ナイチンゲール像の灯すローソクの灯の中で、一人ずつ名前が呼び上げられ壇上でキャップがつけられ、ランプの天使ナイチンゲールのようにと、ローソクに炎を分けてもらい看護婦になる決意を固める式が行われています。この日は、非常に感動的で卵たちは、ナイチンゲールのような立派な看護婦になるんだと心に誓うのです。

クリミヤ熱ともいわれる熱病にもかかりながら丸2年間の献身的な仕事を終えて帰国。フロレンスの働きがイギリスの新聞で話題となり、名声を嫌がってミス婦人という偽名で帰国。帰国後伝染病に感染しながら看護や病室の在り方をもとより、女性の地位を向上させた功績は次回に申し上げます。

